2025年5月18日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

思い違いするなかれ

［ガラテヤの信徒への手紙4章8～20節］

ところで、あなたがたはかつて、神を知らずに、もともと神でない神々に奴隷として仕えていました。しかし、今は神を知っている、いや、むしろ神から知られているのに、なぜ、あの無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようとしているのですか。あなたがたは、いろいろな日、月、時節、年などを守っています。あなたがたのために苦労したのは、無駄になったのではなかったかと、あなたがたのことが心配です。

わたしもあなたがたのようになったのですから、あなたがたもわたしのようになってください。兄弟たち、お願いします。あなたがたは、わたしに何一つ不当な仕打ちをしませんでした。知ってのとおり、この前わたしは、体が弱くなったことがきっかけで、あなたがたに福音を告げ知らせました。そして、わたしの身には、あなたがたにとって試練ともなるようなことがあったのに、さげすんだり、忌み嫌ったりせず、かえって、わたしを神の使いであるかのように、また、キリスト・イエスででもあるかのように、受け入れてくれました。あなたがたが味わっていた幸福は、いったいどこへ行ってしまったのか。あなたがたのために証言しますが、あなたがたは、できることなら、自分の目をえぐり出してもわたしに与えようとしたのです。すると、わたしは、真理を語ったために、あなたがたの敵となったのですか。あの者たちがあなたがたに対して熱心になるのは、善意からではありません。かえって、自分たちに対して熱心にならせようとして、あなたがたを引き離したいのです。わたしがあなたがたのもとにいる場合だけに限らず、いつでも、善意から熱心に慕われるのは、よいことです。わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。できることなら、わたしは今あなたがたのもとに居合わせ、語調を変えて話したい。あなたがたのことで途方に暮れているからです。

[1] ガラテヤの教会とパウロ

　今月はパウロの「ガラテヤの信徒への手紙」を読んでいます。改めて読んでみると、この手紙には並々ならぬパウロのガラテヤの教会の人々に対する愛が満ちているなぁと思います。言葉遣いは結構厳しい所もあるのですが、それだけにうわべだけではない、パウロの本気さが伝わってきます。

　「本気」というのはこういうことです。パウロは少し前に、もしかしたら病気がきっかけという不思議な導きを通して、この外国であるガラテヤの人々に福音を伝え、その後両者の間にはとても良い関係が築かれていました。しかし、パウロが去って行った後、いわゆる「信仰義認」の教えではない教えを吹聴するユダヤ人たちこのガラテヤ教会の中に入って、パウロが伝えたことでは救いには与かれないのだ、ちゃんとモーセの律法を守り、男子は割礼も受けなければいけない、それで神様に受け入れて頂けるのだ、という教えの方にガラテヤの人々は心が傾いてしまっていたようです。それを伝え聞いたパウロは、何ということか！と驚き、又、このままではイエス・キリストの福音から離れてしまうと思って彼は、6:11には、「こんなに大きな字で自分の手で」手紙を送っているのです。その時パウロは本当に悩みながら、祈りながら手紙を書いたのだと思います。初め福音を伝えたのはパウロですから、居ても立っても居られません。でも、彼らのことを裁いたりはしていません。このように記しています。4:19～20。「わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。できることなら、わたしは今あなたがたのもとに居合わせ、語調を変えて話したい。あなたがたのことで途方に暮れているからです。」

パウロにとってガラテヤの教会の人々は、「わたしの子供たち」と思える程、思い出す度に良い思い出が沸き起こって来る人々でした。この手紙の4:13～14にパウロはこう書いています。「知ってのとおり、この前わたしは、体が弱くなったことがきっかけで、あなたがたに福音を告げ知らせました。そして、わたしの身には、あなたがたにとって試練ともなるようなことがあったのに、さげすんだり、忌み嫌ったりせず、かえって、わたしを神の使いであるかのように、また、キリスト・イエスででもあるかのように、受け入れてくれました。」　パウロという人の外見は、いわゆるアスリートとかイケメンとかいうような外見ではなく、背も低く、弱々しかったと言われています。そして、伝道の旅をしていて、迫害も受け、ボロボロのような姿でこのガラテヤに留まっていたのかも知れないのです。でもそんな美しくないパウロのことを「さげすんだり、忌み嫌ったりせず、かえって、わたしを神の使いであるかのように、また、キリスト・イエスででもあるかのように、受け入れてくれた」と感謝しています。パウロの語った福音の言葉を、ガラテヤの人達は、はじめ、本当に心を開いて喜んで聞いたんです。それがあってその地の教会が生まれたし、この「ガラテヤ書」も、私たちは今読める訳です。正に聖霊のお働きですよね。

[2] パウロの心痛めての祈り

パウロの祈り、それはガラテヤの教会の人々が、ちゃんとキリストにつながっていて欲しい！ということです。「わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます」と言っていますね。わたしパウロの中に十字架と復活のキリストが住んでいるのと同じように、あなた方の中にもキリストが形づくられるのは確かなことだ、わたしはそのためであるなら、もう一度産みの苦しみをする、と言っています。では、‟キリストが私たちの内に住む”とはどういうことでしょうか？―それは、自分の人生の舵をキリストに捕って頂く、という‟明け渡し”をすることではないでしょうか？

今、木曜日の「聖書の学びと祈る会」で、旧約聖書のサムエル記上を読んで分かち合い、共に祈っています。この間の木曜日には、茂さんも加わって下さって、5人で分ち合ったのですが、丁度今日のガラテヤ書の内容ともかぶる所があったなぁと思いました。先日はサムエル記上12章でした。ここからイスラエルの歴史に「王」が誕生するのです。イスラエルの民は周りの諸国との緊張関係から国を率いる「王」を求めたのです。最後の士師サムエルはそれを受け入れて、王（サウル）を置くことになるのですが、実はそれは、神様以外に頼ろうとする「悪」でもあるということも語っているのです。しかし、神様もそれを許された以上、サムエルは民にこのように語ります。―「恐れるな。あなたたちはこのような悪を行ったが、今後はそれることなく主に付き従い、心を尽くして主に仕えなさい。むなしいものを慕ってそれを行ってはならない」（サムエル上12:20-21）。

私たち自身、この世の中の現実に生き、その中で神様を信じて生きています。この世はある意味、権力構造が成立しています。それぞれの国を率いるトップがいます。国によっては「王様」ですね。好む・好まざるを超えて、私たちはその政治体制の許に生活します。ではその中で「主」を信じて生きるということはどういうことでしょうか？サムエルが言った通りだと思います。「（この世の王がいたとしても）逸れることなく主に付き従い、主に仕えなさい。…むなしいものを慕わないように」と。それがこの世にあって、しかも信仰者として生きることなのだと思いました。これ、結構厳しいことでもありますよね。この世の王も力強き権力者も、そしてこれからの時代は、生成AIがどんどん人々の生活の指針を与えるような道具になって行くような気配がありますけれども、それを「主」にしてはいけない。それらは神様自身ではなく、どこまでも「むなしいもの」と弁えなければいけないのではないでしょうか。でも、人間は権力に弱いですし、科学や技術にもひれ伏してしまいかねませんよね。

[3]　「知られている」という福音

私たちにとって、この世で生きる中で、信仰者として生きることの‟幸い”って何なのでしょうか？パウロはこのガラテヤ書の4:15で「あなた方が味わっていた幸福はいったいどこに行ってしまったのか？」と問うています。その幸福というのは「ただ主を信じる信仰だけで良い」という自由や喜びだったと思うのです。パウロは、‟思い違いをしてはいけません、律法の遵守や、神を信じるしるしとして割礼を受けること、そんなことは人間が救われる条件では全くない”と気付かせたいのです。パウロがこの手紙で思わず言ってしまった言葉があるのですが、それが信仰の本質をよく表していると思います。4:9です。「今は神を知っている、いや、むしろ神から知られているのに、なぜ、あの無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようとしているのですか」と彼は言いました。信仰というのは、神様を知ることだ、と言ったすぐ後で、「いや、むしろ神様から知られているのに」と言い換えています。そうなんです！私たちが信仰者として生きて行くというのは、私たちが頑張って神様を掴むことではない。そうではなく、神様の方が私たちを知っていて下さっているということなんだと。だから安心して良いのだ、と言うのですね。自分で掴み取ろうとする信仰は、真面目そうに思えるけれど、結局は自己の肥大化であり、不自由な信仰になってしまいますと。そうではなく、あなたはもう神様に覚えられている存在なんだとパウロは言うのです。どうしてそんなことが言えるのでしょうか？

―あの主イエス様の十字架です。神様は、イエス様を通して、私たち一人ひとりを探しに探して、遂に十字架で私たち自身を担い切って下さいました！十字架というのは、私と神様とが一つとされる（された）場所です。先週開いた2:19-20をもう一度お読みします―「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです」。この「わたしが今、肉において生きているのは、神の子に対する信仰によるものです」というのは、「神の子の真実によるものです」とも訳すことが出来る言葉で、パウロはその思いを込めていると思います。‟思い違いをするな。私たちが神を「知る」のではなく、「知られている！」”。この福音だけが、私たちを一生支えるのではないでしょうか。

あなたを命がけで愛したキリストに留まりなさい。それがあなた方の幸福なのだから。パウロの言葉は、今の私たちに深く響いてきます。お祈り致します。

神様、何と不思議な事でしょう。私たちがイエス様を死に追いやった十字架こそが、私たちへの愛の証しであるということ。そこまでして、私たちの「友」となろう、私たちを知ろうとして下さったあなたの愛から目を離すことないようにどうぞお守り下さい。どうか、この世を生きて行く中で空しいものの奴隷となることなく、ただあなたこそ「まことの王」として生きさせて下さい。私たちには励まし合う教会の仲間もいます。お一人お一人の上に、新たに生きる力と、上からの平安を満たして下さい。主イエス・キリストによって祈ります。アーメン。